

絶望しない

ながれ

中村 周 (なかむら しゅう/会社員、元インターン生、東京都在住)

「社会は確実に劣化している」。世界中で記録される異常な暑さ、国際社会が止められなかったウクライナ侵攻、コロナで顕在化した社会課題、変わらない政治、変わらない日本社会など、ネガティブな事象を挙げ始めるとキリがない。3歳になった娘の将来を案じると、決して明るい未来を想像できないが、そんな気持ちで子どもを育てたくはないので、ここからは前向き思考で筆を進めたい。

最近至る所で聞くようになった「パーパス」。「パーパス」とは、一言で言うと企業の「存在意義」であり、多くの企業では創業時に定義されていると思うが、企業活動や社会が複雑化する中で、目的を見失わないよう、何のために自分たちが存在しているのか、どのような価値を社会に提供しているのかを今一度再定義したものだ。

私が働いている会社でも「パーパス」の浸透に積極的に取り組んでいるが、単に会社が定めたものをトップダウンだけで浸透を図るのではなく、社員一人ひとりが個人の「パーパス(使命やミッション、価値観)」に焦点を当て、会社と個人の「パーパス」が重なり合う部分を探求するボトムアップ型で進めている。ここで重要なことは、決して会社の「パーパス」に個人のそれを合わせに行く必要はなく、仮に社外に「パーパス」を実現できる場があれば、会社を離れることもよしとしている点である。また、会社という枠の中で自分の価値観と向き合うのではなく、自分の人生/ライフを考える中で「会社のパーパス」をどう位置づけるかを求めている。

いま私の会社では、この「パーパス」を起点に、通常業務で接することのない社員同士の対話などを通じて、人生で何を成し遂げたいのか、何のために存在するのか、各々が自身の内面、存在意義と向き合っている。こうした活動を通じて、社会課題に目を向け、それに自分がどう関わっていくかを真剣に考えることになる。まだ、活動は端緒に就いたばかりだが、大きく変わっていく兆しは感じている。

先日歴代インターン生によるオンライン情報交換会に参加したが、ここでも対話の力を感じた。年齢や活躍の場が多様性に富んでいたこともあり、大いに刺激を受けた。またコノエさんや所長からは約30年の活動にも関わらず、社会が変わらないことへの歯がゆさが語られたが、例え社会が変わる兆しを感じられなくても30年間活動を続けられていること自体が社会に十分伝わり、受け入れられている証左ではないかとも感じた。

私も環境問題に思いを持ち会社員生活をスタートし今年で18年目になるが、結局一人一人はちっぽけな存在で自分の周りのことしか変えられない。しかし、その積み重ねがやがて社会を変えることにつながっていく。最近改めてそんなことを感じている。決して絶望することなく、身の周りを変えることにささやかな幸せを感じ、ユーモアを忘れず前向きに歩んでいきたい。それが親としての今の思いで、家族で自然環境に近い場所でやりたかったことを少しずつ実践したいと、現在鎌倉での新生活の準備を進めている。いざ鎌倉！